

二形態の連体修飾用法を持つ形容詞

—形容詞「遠い」における「遠い+N」と「遠くの+N」—

篠崎 大司

1 はじめに

日本語教育における形容詞は、初級の比較的初期の段階で導入される極めて基本的な文法事項である。そして指導の際、その用法を叙述用法と連体修飾用法の2つに分けて指導するわけであるが、通常はいずれの用法でも形態が変わらないものが原則として扱われている。

(1) 富士山は高いです。(『みんなの日本語 I』第8課 p.64)

(2) 富士山は高い山です。(同上)

しかし、実際には二形態の連体修飾用法を持つ形容詞も少なくない。ところが、そうした複数形態の連体修飾用法を持つ形容詞を、積極的に指導項目として取り上げている日本語教材は皆無に等しく、従って、必ずしも十分な指導ができていないのはいい難いのが現状である。確かに、たとえ二形態あるとしても、極端な意味の違いを引き起こすことはほとんどなく、中には互換可能なケースがあるのも事実である。

しかし、名詞を修飾する2つの形態が常に互換可能というわけではなく、そのことが学習者の誤用を引き起こす要因ともなっている。

(3) T: リーさん、学生セミナーはどうでしたか。

L: はい、とても良かったです。多い問題について話し合いました。

T: (何が多いのかな?) (新屋他 1999 p.148)

(4) バスの中から遠い山が見えました。(宮原 1996 p.304)

これらのことから、本稿では「遠い+N」と「遠くの+N」の用法差の分析を試みたい。実際、これらは互換可能な場合(用例(5))もあるがそうでない場合(用例(6)(7))もあり、使い分けが判然としない。

(5) (遠い 遠くの) 親戚より近くの他人

(6) (*トオイ 遠くの) 方に提灯が二つ見えた。(志賀直哉『焚火』)

(*は非文を、ひらがな漢字交じり表記が原文を表す。)

(7) 今になって振り返ると、(遠い *トオクノ) 昔にあったこととしか、
感じられない。

本稿では、より精緻な用法差の解明を通して、二形態の連体修飾用法を持つ形容詞の特性を明らかにしたい。具体的には、以下の2点について考える。

1. 「遠い+N」と「遠くの+N」は、それぞれどのように使い分けられているのか。
2. 形容詞「遠い」の連体修飾用法の特性とは何か。

2 先行研究の検討

2-1 基準点の取り方

「遠い+N」と「遠くの+N」の相違について述べたものに森田(1987)、飛田・浅田(1994)、庵他(2000)がある。これらに共通する点は、いずれもその違いを基準点の取り方に求めている点である。つまり、「遠い+N」は基準点を任意に取ることができるが、「遠くの+N」は現在地に限られるというものである。ここでは森田(1989)の言及を中心に考察を試みる。彼は次のように述べている。

「遠い／近い」は「駅から遠い人」「学校に近い人」のように、①基準点を任意に取ることができるが、「遠く／近く」は「遠くのほうを見た」「近くの人が駆け寄った」のように、文脈中の現在地を基準にする。そのため、②「遠い／近い」は「(東京を基準点として)九州は大阪より遠い」と比較表現ができるが、「遠く／近く」はできない。「韓国は中国より近くの国だ」とは言えない。「近くの店」は現在地を基準としてそこからすぐの所にある店。「近い店」は「ある店よりも近い店」「もっと近い店」のように、他の店を基準にしてそれより近い距離にある店の意。(森田 1989 pp.782 - 783)

「遠い」の意味内容において「基準点」が関与していることは理解できるが、それが両者の用法差を包括的に説明しきれるとは考えにくい。なぜなら、両者の使い分けに関して基準点の取り方だけでは説明しきれない諸々の現象があるからである。

まず、「遠い+N」と「遠くの+N」の用法域の関係がある。森田(1989)の「基準点を任意に取る」が「基準点の設定に制限がない」ということであるならば、「遠くの+N」に限って「現在地」という制限つきであるから、両者は「遠い+N」が「遠くの+N」を包含する関係、言い換えれば「遠くの+N」の用例はすべて、「遠い+N」に置き換えられる関係ということになる。しかし、実際には先の用例(6)のように「遠い+N」に言い換えられない「遠くの+N」の用例も観察される。

また、文脈中の現在地を基準にする場合でも、常に両方が使用可能というわけではない。例えば、下の(8)(9)の用例は、いずれも話し手の存在地が基準点となっているが用法に差が生じている。

(8) 私の兄は仕事の関係で(遠い *トオクノ)九州に住んでいる。

(9) (*トオイ 遠くの)方で子鴨の一群が飛び立った。

(志賀直哉『十一月三日午後』)

これらのことを考えると、少なくとも「遠い+N」と「遠くの+N」は部分的に重なりつつ、それぞれが独自の用法を有する関係と解した方がよい。

さらに森田(1989)は、「遠く/近く」が比較表現に用いられない理由を基準点の取り方に求めているが、その根拠が必ずしも明確とはいえない。また、「遠くの+N」は比較表現には用いられないが、最上級表現だと用いることができるのはなぜかという疑問も起こる。

(10) 逃げる時は最寄りのエレベーターを用いず、一番遠くの隅まで走って行って、そこのものに乗ること。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)

2-2 述語形式による連体修飾と助詞「の」を伴った連体修飾

「遠い+N」と「遠くの+N」は、言い換えれば、形容詞の述語形式による連体修飾か助詞「の」を伴った連体修飾かということになる。

前者については佐久間（1957）の「装定」に始まり、寺村（1991）、沢田（1992）、一井（1997）などがある。また、後者については大島（1998）がある。

沢田（1992）は、名詞と形容詞の担う伝達機能の違いに着目し、「指定」と「非指定」という対立概念を提示することにより、両者の示差的特徴（すなわち前者は名詞の、後者は形容詞の特徴を表す。）を明らかにしている。そして、その対立概念が連体修飾用法においても適用できることを示している。沢田（1992）は、「指定」と「非指定」を以下のように定義している。

1) 指定……あるセットの中から特定のものを選び出し、指し示すこと。選択範囲が背景的知識（文化、及び、文脈・場面）として話し手と聞き手の間で了解されていることを前提としている。端的に言えば、二者択一の「どっち？／どっちの？」、マルチプル・チョイスの「どれ？／どの？」という疑問詞によって引き出される回答が「指定」である。また、「どこ？／どこの？」という疑問詞に対応する回答も、限られた空間の中の特定の部分や部位を選び出し、指し示すという点で「指定」の範囲に含める。

2) 非指定……限られた選択項目の中から一つを選び出して、相手に伝えるという目的の下にその語を運用するのではなく、単にそのモノの様態として伝達するのが「指定」に対立する「非指定」という概念である。端的に言えば、「どんな？」という疑問詞によって引き出される回答はすべて「非指定」ということになる。述定の場合、様態として実現されるモノの性質には、発話者によって一時的に切りとられ、主体的に描写される性質と、既にそのモノの定まった性質として非主体的に述べられる恒常的属性の二段階がある。さらに恒常的属性は、装定において類別機能（いわゆる下位区分し、限定する機能）を発揮する場合と、類別機能を持ち得ず、非制限的に働く場合との二種類がある（沢田（1992）pp. 2-3）

この対立概念を本稿の問題に照らして、下の用例で確認してみよう。

(11) a. 遠くの親戚より近くの他人

b. A : どちらの / どの親戚ですか ?

B : (遠くの * 遠い) 親戚です。

(12) a. 遠い親戚より近くの他人

b. A : どんな親戚ですか ?

B : (* 遠くの 遠い) 親戚です。

一見同じような意味に取れる用例 (11) a と用例 (12) a であるが、用例 (11) b、(12) b で比べてみると、確かに「遠い+N」は「非指定」、「遠くの+N」は「指定」と、その違いが明確に浮かび上がってくるのが分かる。

沢田 (1992) はさらに、恒常的属性の下位区分を類別機能がある「限定」と機能のない「描写」に分け、前者を「被修飾語によって示されるモノに内在しうる属性のうち、一つを引き出して、下位の要素として仕立てる性質」(沢田 (1992) pp. 5 - 6) ⁽¹⁾、後者を「話し手が知覚したものをそのまま写しとったり、あるいは受けた印象を素直に表出し描き出すこと」(同 p. 9)、と規定した。ただし、日本語の場合は、装定環境では両者の違いは明確ではないとしている (同 p. 9)。

これに対して一井 (1997) は、判断を困難にさせる要因があるものの、両者の違いは明確であるとして、「描写」と「限定」を表1のように整理している。

表1 「描写」と「限定」

	「描写」	「限定」
〈機能的相違〉	・主体の個人的情報で対象を特徴付ける	・上位の集合から下位の集合を引き出す
〈背景的相違〉	・主名詞は具体的・実際の事物を表す	・主名詞は上位の集合を表す
〈過程的相違〉	・主体の実際の知覚・経験を通す	・主体の実際の知覚・経験を通さない
〈結果的相違〉	・装定形容詞が対象の恒常的属性を表すとは限らない	・装定形容詞は対象の恒常的属性を表す

(一井 (1997) pp.134 - 135)

上記両者の境界線の有無については、「遠い+N」「遠くの+N」の分析の中で検討する必要があると思われる。

最後に、助詞「の」を伴った連体修飾について大島（1998）をあげる。大島（1998）は「太郎の本」「日本の自動車」のように「Xの」が体言を修飾する場合を「ノ型連体句」と呼び、以下のように述べている。

「XのN」における「X」は「N」に関連する事象の中で中心的な役割を果たす要素、言い換えれば、「N」に関連する事象の「キーワード」として機能する要素である。…中略…キーワードによって名詞の表わす事物に関連する事象を示し（「関連」の仕方は文脈によって決定される）、データベースにおける検索と同様、そのキーワードにより事物の集合から部分集合を切り出すのである。（大島 1998 p.49）⁽²⁾

さらに、本稿と関連のある「数量詞+「の」」について大島（1998）は「「の」の導く数量詞は後続する名詞の表す事物の“存在のしかた”を表す。つまり、これらも当該の事物に関連する事象について述べる表現だと言える。」（大島 1998 p.49）と指摘し、以下の用例でそれを示している。

- (13) a. 3人の学生：3人（存在する）学生
- b. 5冊の本：5冊（存在する）本

実際に「遠くの+N」の用例を見てみると、確かに「遠く」が「N」の存在のしかたを表している。

- (14) a. けれども、私はその餓鬼を志し、いきつけの床屋を避けて遠く
 の床屋へ行ったのである。（三浦哲郎『幻燈畫集』：下線筆者）
- b. 遠く（に存在する）床屋

- (15) a. 最も用心深いのは、まず最寄りの階段を一階だけ走り降りてから
 遠くのエレベーターまで走って行くこと。

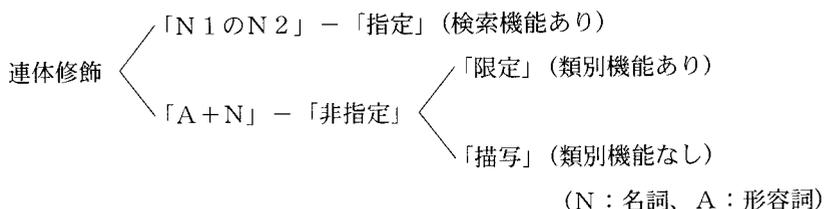
（藤原正彦『若き数学者のアメリカ』：下線筆者）

- b. 遠く（に存在する）エレベーター

これまでの考察から、当該の連体修飾用法を分類整理すると、図1のよう

になる。

図1 連体修飾用法の分類



これらを踏まえた上で「遠い+N」と「遠くの+N」の用法差のより包括的な分析を次節以下で試みる。

3 「遠い+N」と「遠くの+N」の使い分け

3-1 連体節を形成するか否か

「遠い+N」は格助詞を含んだ連体修飾節を形成することができるが、「遠くの+N」は程度副詞を伴う程度で、節を形成することはない。

(16) 庄九郎が、さまざまな理由をつけて川手の府城から長良川の河畔の枝広城に移し、さらにそこが洪水で崩れたのを幸い、美濃の中心から(遠い *トオクノ) 大桑の山城に移してしまった。

(司馬遼太郎『国盗り物語』)

(17) 100光年より(遠い *トオクノ) 星は、絶対光度を利用して距離をはかる。

(http://spaceboy.nasda.go.jp/note/shikumi/j/shi09_j.html)

(18) 図書館が(遠い *トオクノ) 地域には、自動車図書館が巡回サービスを行っています。

(<http://www.city.setagaya.tokyo.jp/benricho/shisetsu/toshokan/>)

これは、「遠い+N」が述語形式による連体修飾であり、「遠くの+N」は「N₁+の+N₂」という句形成であることから容易に理解できる。この場合、「遠い+N」はある距離感に言及した表現となるが、単独である距離感を示

す場合はほぼ自動的に話し手の位置あるいは文脈中の現在地がその基準点になる(3-2-1 a)ため、それ以外の基準設定が必要な場合「から」「より」「が」等を用いて節が形成されると考えられる。先の森田(1989)の比較表現に関する指摘も、「遠くの+N」が比較に関わる格助詞「から」「より」などと共起できないために表現形式に制限があると言うほうが適切であり、基準点の取り方も格助詞との共起制限からくる付帯的結果とみなすことができる。このことから、なぜ「遠くの+N」は比較表現ができないにも関わらず最上級表現ができるのかという疑問についても説明が可能となる。

3-2 単独で用いられる場合

3-2-1 「遠い+N」しか使えない場合

「遠い+N」の修飾形態として特筆すべき点は、まず、2点間の距離そのものに焦点が向けられた表現であるという点である。さらに、「遠い」は主名詞を他の同類から選択的に切り取るのではなく、主名詞に内在する様態の形容として機能している点であり、まさに「非指定」の用法にあたると言える。以下で具体例を示す。

a) 距離感

修飾する距離の対象が時間的(用例(19))、空間的(用例(20)(21))、心理的(用例(22))、对人的(用例(23)(24))距離を表す場合、「遠い+N」は用いられ、「遠くの+N」は用いられない。これらの用法は話し手あるいは文脈中の現在地を基準点として、それと主名詞との距離感そのものに言及した表現となっている。また、距離の対象に様々なバリエーションがあるのも「非指定」用法である「遠い+N」の特徴であるといえる。

(19) なまじ真面目人間の荒井には、若い女に対する免疫ができていない。

妻の智子が(遠い *トオクノ) 昔にそうだったように、晃子の裸身は、光り輝いていた。(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(20) しかし、それは海や広い大陸をへだてた(遠い *トオクノ) 国々のことであり、銃火の響きも、硝煙のにおいも、恐ろしい新兵器である毒ガスも、日本にはなにひとつ伝わってこない。

(星新一『人民は弱し 官吏は強し』)

(21) 実際の運動は(遠い *トオクノ) 山形県で行われていたのだったから。
(北杜夫『楡家の人々』)

(22) 藤壺の宮は、源氏にとって、ますます(遠い *トオクノ) ひとつとなった。
(田辺聖子『新源氏物語』)

(23) 「どや、(遠い *トオクノ) 親戚でもおらんのか、ここへ来てさえくれたら、出したるで」(野坂昭如『ラ・クンパルシータ』)

(24) 妹背米次郎は、加恵の実家である名手本陣の(遠い *トオクノ) 縁戚に当り、去年の暮から直道に入門していた若者である。

(有吉佐和子『華岡青洲の妻』)

主名詞に着目してみると、特に時間的距離の場合「昔」「過去」「将来」等といった漠然としたものがつきやすい。空間的距離の場合、漠然としたもの(用例(20))と、逆に特定の場所を表すもの(用例(21))がある。また、对人的距離の場合「親戚」「縁戚」「親類」等といった血縁関係を表す名詞が後接する。

試しに上記の用例のいくつかを、以下のように検定してみると、「非指定」用法であることがより明らかとなる。

(19') A: (*どっちの どんな) 昔?

B: 遠い昔。

(21') A: (*どっちの どんな) 山形県?

B: 遠い山形県。

(23') A: (*どっちの どんな) 親戚?

B: 遠い親戚。

さらに用例(19)の「遠い昔」と主名詞「昔」との関係を見てみると、後者が前者の上位の集合になっている。また、用例(21)の「遠い山形県」と主名詞「山形県」においても、後者の持つ様々な側面の中から下位の集合を引き出した表現と捉えることもできる。ただし、先の表1に掲げた観点すべてについて明確に判定できるわけではなく、傾向として、「限定」的用法に傾いた用法であると言える。

以上の他に、主名詞がある種の理想や目標を表し、それと話し手や話題に出てくる主体の現在の状況とのギャップに言及したものもある。

(25) まだまだ (遠い *トオクノ) ブロードバンド

(<http://www.sanotec.co.jp/colum/0022.htm>)

(26) カージナルス・田口、(遠い *トオクノ) メジャー初安打

(http://www.sponichi.com/w_sp/200203/05/w_sp68959.html)

本項でさらに注意を引くのは、「遠い」によって「非指定」に距離感を表すものの中に、すでに形態的に表現が定型化されたものが見られることである。以下に掲げる。

a') 反復強調

「遠い」の持つ「非指示」・「限定」的用法として、表現の繰り返しによる距離感の強調がある(反復強調)。この場合、形容する観点に制約はなく、時間的(27)・空間的(28)・心理的(29)等、様々に用いられ、先のa)距離感の一種であると言うことができる。

(27) (遠い遠い *トオクノトオクノ) 昔の話。一切のすべてが始まる前。

カオス(混沌)の中より一人の女神ガイアが誕生した

(<http://hb2.seikyoku.ne.jp/home/Ichy/gaia.html>)

(28) 私にはその人が、なぜか(遠い遠い *トオクノトオクノ) 国の異国の人間のように見えた。(五木寛之『風に吹かれて』)

(29) 何故かいつまでも心に残り必ず六十歳になったら感謝の集いをしようとして心に決めていました。その時六十歳などはるか(遠い遠い *トオクノトオクノ) 先のことで、私にはその時の自分が想像すら出来ませんでした (<http://www.ikenobo-yasuko.net/report/>)

a'') 「遠い+ところ」型

主名詞が名詞「ところ」の場合、「遠い」は付きやすく、「遠くの」は付きにくい。「ところ」には聞き手の本来の存在位置を基準点として話し手の現在地を表す場合(用例(30)(31))と、逆に話し手の現在地を基準点として話題となっている人物や場所等の位置を表す場合(用例(32)(33))が

ある。特に前者では慣用的に挨拶の一部として用いられることが多い。いずれの場合も「ところ」の示す場所は、それが不問であるか否かも含めて、話し手・聞き手の間で既に了解済みのことであり、「遠い」は「非指定」的に主名詞を形容していると言うことができる。また、a')と同様、空間的距離感の一種と言うこともできる。

(30) (遠い *トオクノ) ところをすまなかつたな

(池波正太郎『剣客商売』)

(31) 今日は (遠い *トオクノ) ところ、ご苦労様です。

(<http://www2.ocn.ne.jp/~kenpouto/teruko2.pdf>)

(32) 「江の島だなんて、そんな (遠い *トオクノ) とこへいくのこわいわ、
あたし」 (山本周五郎『さぶ』)

(33) 休みの日に、国際交流員は時々、(遠い *トオクノ) ところに出
かけます。

(<http://www.pref.nagano.jp/soumu/kokusai/cir/r-mite7.htm>)

これら2つのケースの区別は、前者は「ところ」に格助詞「を」(ないしゆ)が後接し、後者には格助詞「へ」「から」「に」が後接するという傾向がある点である。

なお、上記用例は以下の検定により「非指定」に類するものであることを確認することができる。

(30') A: (*どっちの どんな) ところ?

B: 遠いところ。

(32') A: (*どっちの どんな) ところへいくのがこわいの?

B: 遠いところ。

b) 様態

「遠い」は通常「場所などの対象物そのものに備わった属性ではなく、もうひとつの対象物との相関関係」(國廣哲彌 1982 p.161)を表すが、それだけでなく一般の属性形容詞にみられるような主名詞に直接言及し、そのものの様態を形容する用法も存在する。これに関連して西尾(1972)は「例外的に……「旅」「航海」「道」など空間的な移動またはそれに関係のある名

詞と結びついたときだけ、性質の表現になる可能性をもっている。こういう「とおい」は「ながい」におきかえても文は一応成り立つ。」(西尾 [1972 p.237])
として、以下の用例をあげている。

(34) 古い時間表をめくってみた。どっか遠い旅に出たいものだと思う。
(林美美子『放浪記』)

(35) 始めて遠い航海を試みる葉子にしては、それが不思議な位たやすい旅だった。
(有島武郎『或る女』)

西尾 (1982) が示した例は、主名詞の空間的的属性である距離感に対する話し手の印象 (それゆえ主観的) を述べており、「非指定」の「描写」的用法の特徴を強く反映した表現であると言える。

ただし、本項に該当するものは、西尾 (1972) の指摘だけではない。

(36) 召集ということばは、加藤には聞きなれないことばだったが、そのことばをとおして加藤は、いまだかつて一度も経験したことのない遠い不安を感じた。
(新田次郎『孤高の人』)

(37) 彼女の顔を光り輝かせるようなことはしなかった。冷たく遠い光であった。
(川端康成『雪国』)

「遠い」には距離感を形容するばかりでなく、例えば「耳が遠い」「電話が遠くて聞こえない」などといった感覚的な鈍さを表す用法がある。用例 (36) (37) は「遠い」が主名詞 (「不安」、「光」、「声」) から受ける感覚的な鈍さを表しており、「うつろな」「おぼろげな」といった意味に近い。また、用例 (38) の「遠い目」は「遠くを見るような目」という意味に解されようが、この類も同様に「描写」的用法に傾いた表現であるということができよう。

(38) 「お屋形さま？」と、庄九郎は (遠い *トオクノ) 目をした。
(司馬遼太郎『国盗り物語』)

なお、用例 (34) (35) の場合、話し手の所在地が基準点となっており、その意味で「遠い」の持つ方向性₍₃₎が保持されていると言えるが、用例 (36) (37) (38) の場合、方向性は払拭され基準点との関連は認められない。

3-2-2 「遠くの+N」しか使えない場合

「遠くの+N」の修飾形態の特徴としては、以下の3点をあげることができる。

まず、形容対象が空間的距離に限られるという点である。これは先の「遠い+N」とは対照的な現象と言える。

次に、「遠くの+N」は、先の「遠い+N」とは異なり、「遠くの」が「N」を引き出す検索機能を果たす「指定」要因として機能することにより、結果的に「N」の存在のしかたを表しているという点である。

最後に「遠くの+N」は名詞による連体修飾構造をとりながら、絶対形容・相対形容双方の性質を担っているという点である。

この点について加藤(2003)は、名詞による連体修飾とナ形容詞によるそれとの意味の違いを絶対形容・相対形容という概念で整理している。加藤(2003)によれば、前者が担う絶対形容とは、「そうであるかないか、ある表現で表現すべき範囲に含まれるかどうかということだけに言及するもの」(加藤(2003) p.99)であり、後者が担う相対形容とは、「段階性・程度性を想定できるもの」(同上)であるという。両者の違いは、程度副詞を前接させることによって確認することができる。

(39) a. かなり元気な人

b. *かなり病気の人

(40) a. かなりやくざな商売(加藤(2003) p.100)

b. *かなりやくざの商売(同上)

上記のように、絶対形容・相対形容という概念は、単に名詞とナ形容詞の境界を示すばかりでなく、対義関係でありながら連体修飾形態が異なる用例(39)の場合や、双方の形容が可能な用例(40)の場合の意味上の違いを説明するのに有効な手段であると言える。

そこで、この概念を「遠くの+N」にあてはめて考えてみると、そもそもこれは不特定多数のものから特定のものを選び出す「指定」的用法に区別されるわけであるから、その意味では絶対形容の性質を担っているといえる。また、同時に程度副詞を前接させることも許容しており、その意味では相対形

容の性質も担っている。

(41) かなり遠くの親戚

(42) この望遠鏡を使うと、かなり遠くの方まで見ることができます。

これは、名詞と形容詞が連続的な関係であることを示す一例であると同時に、「遠くの+N」の持つ特徴を示すものである。

以上の考察を踏まえたくて、以下に具体的な用法について述べる。

a) 空間的距離－存在のしかた

先の2-2で掲げた用例(14)(15)は、本項目に該当する用法である。以下に同様の例を挙げる。

(43) a. 地図を何枚か張り合わせるのは、(?トオイ 遠くの) 地形を見るためだろうと思った。(新田次郎『孤高の人』)

b. 遠く(に存在する)地形

(44) a. サルの眼力、どんな(*トオイ 遠くの)バナナも見えちゃうほど抜群!

(http://www.amusementvision.com/ja/products/monkey_ball/chara/)

b. 遠く(に存在する)バナナ

(45) a. 車や電車を使わず、できれば、午前と午後2回に分けてチョット(*トオイ 遠くの)スーパーへ買い物に行こう。

(<http://www.angelpafe.com/prettywoman/dai1.html>)

b. 遠く(に存在する)スーパー

ここで主名詞に着目してみると、「N」は「遠くの」によって「指定」されるわけであるから、前提として複数の選択の余地があることが必要である。実際、上の用例の主名詞「地形」「バナナ」「スーパー」においてもそれが認められよう。「遠くの」が固有名詞と共起しにくいのも、そういった点に原因があると考えられる。

また、先のa)の場合と同様、「遠くの+N」においても、形態的に表現が定型化されたものがある。以下に掲げる。

a) 「遠くの方」型

主名詞が方向を示す名詞「方」の場合、「遠くの」がつき、「遠い」はつかない⁽⁴⁾。以下に例を示す。

(46) 血清はまだか！という声が（*トオイ 遠くの）方でした。

（立原正秋『冬の旅』）

(47) 彼はちょっとの間、（*トオイ 遠くの）方を見つめるよな眼つきをした。

（福永武彦『草の花』）

(48) （*トオイ 遠くの）方に提灯が二つ見えた。（志賀直哉『焚火』）

(49) （*トオイ 遠くの）方から夜警のつく棒の音がしてくる。

（谷崎潤一郎『痴人の愛』）

用例をみると、「遠くの方」には位置に関わる格助詞の後接していることがわかる。実際、収集した用例の大半は「に」「で」「を」「から」「より」といった格助詞が後接していた。そもそも、名詞「方」はただ漠然と方向性のみを示すものであるため、単独では表現が完結しない。そのことが、空間的距離によって特定の場所を「指定」する「遠くの」や位置を表す格助詞と共に起しやすい理由であると考えられる。

a'') 「遠くのもの」型

主名詞が名詞「もの」の場合、「遠くの」がつき、「遠い」はつかない。この場合、「もの」は遠くにあるものであれば何でもよく、特に制限はない。

(50) 近視は、（*トオイ 遠くの）ものにピントが合いにくいというところですが、その特長は水晶体（レンズ）を調節する「毛様体」という筋肉が継続した緊張状態にあることです。

（<http://www.syatyu.com/shop/192/p02.htm>）

(51) 「てこちゃん、今なにを見てる。」

「（*トオイ 遠くの）もの。」

「ずっと遥かなものね。」

（石川淳『処女懐胎』）

(52) （*トオイ 遠くの）ものを取るときは、左の裾を軽く押さえてとり、箸は左手の器を持った指と器の間にはさんで右手に持ちます。

（<http://www.shoku-chan.com/alacarte/kimono/003.html>）

これも先の名詞「方」と同様、「もの」の持つ意味上の漠然さが「遠くの」との共起を誘発しやすくしているものと考えられる。

3-2-3 両方使える場合

空間的距離に限って「遠い+N」と「遠くの+N」が相互互換が可能な場合がある。

(53) (遠い トオクノ) 山の方からその汽笛の音はかすかに反響になって、
二重にも三重にも聞こえて来た。(有島武郎『生まれ出づる悩み』)

(54) 灰色の空から際限なく舞い落ちてくる雪片を眺めていると、あまり
に静かで、現実離れしており、戦争のことなどなにか(遠い トオク
ノ) 国の出来事のようにも思われた。(北杜夫『楡家の人々』)

(55) このため、掻い出した水はいちいち(トオイ 遠くの) 川へ捨てに
ゆかねばならなかった。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

(56) 私は(トオイ 遠くの) 丘に見た野火を意識した。(大岡昇平『野火』)

これらのケースは、主名詞の様態を述べた表現であると解釈される一方で、主名詞「山」「国」「川」「丘」そのものが潜在的に選択の余地を許容するものであるため(例えば、「山」の場合、眼前に見える山々の中からその一部を「遠くの」によって「指定」する。)、用法の対立が中和されたと考えられる⁽⁵⁾。

3-3 まとめ

以上、本節における「遠い+N」と「遠くの+N」の使い分けを、先の図1の枠組みに即してまとめると、以下の表2のようになる。

表2 「遠い+N」と「遠くの+N」の用法差

	連体修飾形成の有無	単独で用いられた場合					
		「非指定」					「指定」
		「限定」(=距離感) (「反復強調」・「+ところ」)				「描写」 (=様態)	存在のあり方 (「+方」・「+もの」)
		時間	空間	心理	対人		
遠い+N	○	○	○	○	○	○	×
遠くの+N	×	×	×	×	×	×	○

※「○」は使用可、「×」は不可、点線は明確な境界線がないことを表す。

4 形容詞「遠い」の連体修飾の特性

これまでの考察から、形容詞「遠い」がなぜ二形態の連体修飾用法をもつのか、という2番目の問いに対する解答も得ることができよう。

通常、複数の連体修飾形態を持たない形容詞では、本質的には異なる「指定」「非指定」という2つの用法を一形態で兼務している。また、特に属性形容詞について言えば、いずれの用法の場合も、形容の根拠を主名詞の内部に求めることができる。つまり、形容対象と主名詞が完全に一致しているわけである。

一方、形容詞「遠い」の場合、「遠い」とは別に名詞「遠く」があることによって生じた二形態の連体修飾用法が、「指定」・「非指定」という修飾機能上の役割分担をなしている。これは、形容詞「遠い」の持つ1つの特性と言えよう。

さらに、形容対象と主名詞が同一ではないことによって、基準点の設定という補助的作業が必要になること、従って様態用法はむしろ例外的なものであることも特質の一つとして挙げられる。

加えて、「遠くの+N」については絶対形容・相対形容双方の性質を担っている点も見逃すことはできない。

以上が形容詞「遠い」の連体修飾の特性であると言うことができる。

5 おわりに

「遠い+N」と「遠くの+N」の分析において、「基準点」の存在を無視することができない。しかし、それはあくまでも分析の一手段であって、それによって両者の違いを包括的に説明しきれわけではない。本稿では、「遠い+N」が「非指定」的修飾を、「遠くの+N」が「指定」的修飾を担うと捉えることにより、両者の用法差に関わる諸々の現象を説明することができた。

このように、形容詞「遠い」に代表される二形態の連体修飾用法を持つ形容詞は、一形態の連体修飾用法しか持たない形容詞ではなかなか見ることができない、語による修飾構造の解明の場を我々に提供してくれる。二形態の役割分担の詳細な分析から得られた知見は、結局は語による修飾構造一般の解明に寄与するものであり、その点に本研究の意義を求められると思う。

今後はさらに、二形態の名詞修飾用法をもつ同様の形容語（「近い／近くの+N」「白い／白の+N」「大きい／大きな+N」等）について、その機能分化のあり様を詳細に分析することにより、語による名詞修飾の特性を明らかにしていきたいと考えている。

用例出典

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』及びインターネット上で公開されているホームページ（検索エンジンはYahooを使用）

注

- (1) 「指定」と「限定」の違いについて沢田（1992）は、前者を「聞き手との間で了解されている明確な選択範囲を背景とした“伝達行為としての区別”」（沢田（1992）p. 6）であるとし、後者を「語彙の体系から生じるぼんやりとした副産物的な含意」（同上）であるとして、両者は本質的にレベルの異なるものであるとしている。

- (2) この大島 (1998) の指摘は、先の沢田 (1992) の「指定」に通じるものがあると思われる。
- (3) 國廣哲彌 (1982) p.161 参照のこと。
- (4) ただし、以下のように、例外的に「遠い」と共起するものも極めて少数であるが見受けられる。
- (例1) 引越しをするなら、大学から (遠い 遠くの) 方がいいですか、近いほうがいいですか。
- (例2) 自分がいるところより、(トオイ 遠くの) 東の方がもっと黒い雲で、雨の勢いも強かった。
- (<http://kids.gakken.co.jp/campus/kids/vote/vote2000/vote02comment.html>)
この場合は、対立の中和が働いていると思われる。この点については、3-2-3 及び沢田 (1992) p. 6 参照。
- (5) 沢田 (1992) p. 6 参照。

参考文献

- (1) 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- (2) 一井正美 (1997) 「形容詞の二つの機能—装定で用いられた形容詞について—」『日本語・日本文化研究』七 大阪外国語大学
- (3) 大島資生 (1995) 「「は」と連体修飾構造」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版 pp.109 - 138
- (4) —— (1998) 「現代日本語における「Xの」の諸相」『東京大学留学生センター紀要第8号』pp.43 - 69
- (5) 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- (6) 國廣哲彌 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- (7) 佐久間鼎 (1957) 「修飾の機能」『日本文法講座5 表現文法』明治書院
- (8) 沢田奈保子 (1992) 「名詞の指定性と形容詞の限定性、描写性について」『言語研究』102
- (9) 新屋映子他 (1999) 『日本語教科書の落とし穴』アルク

- (10) 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
- (11) ——— (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- (12) ——— (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版
- (13) 外池滋生 (1990) 「「の」の論理形式－「は、が、も」の論理形式に続いて」『明治学院論叢』 446 pp.69 - 99
- (14) 西尾寅弥 (1972) 『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
- (15) 仁田義雄 (1981) 『語彙論的統語論』 明治書院
- (16) 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版
- (17) 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法－改訂版－』 くろしお出版
- (18) 町田 健 (1997) 「形容詞の意味について」『北海道大学文学部紀要』 45 - 3
- (19) 宮原 彬 (1996) 『外国人が日本語で作文を書くための用例集』 凡人社
- (20) 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店